高齢者居住施設における個室・ユニット化の意義および問題点

—個室・ユニット型養護老人ホームへの建替え事例を通して—

CLARIFICATION OF MERITS AND DEMERITS OF GROUP LIVING WITH PRIVATE ROOMS
AT ELDER FACILITIES

—Case study on relocation to the assisted living with units and private rooms—

神吉 優美*, 高田 光雄**, 三浦 研***, 寺川 政司****

Yumi KANKI, Mitsuo TAKADA, Ken MIURA
and Seiji TERAOKA

This study focused on residents' changes in space-use and behavior due to moving from the old assisted living home to the new one. Behavior tracking survey and interview with residents were carried out at both homes.

- 1) As residents became accustomed to the new environment, they realized merits of private rooms.
- 2) Most residents appreciated group living, but the risk of small-scale living is that interpersonal problems can increase.
- 3) There are great differences among individuals in changes in space-use and behavior.
- 4) At the old home, roommates affected residents' space-use and behavior.

*Keywords : Assisted Living, Group Living, Private Rooms, Roommates,
Changes in Space-use and Behavior*

養護老人ホーム, グループリビング, 個室, 同室者, 生活展開の変化

1. 研究の背景と目的

施設病 (hospitalism) という言葉がある。施設に入所している内に発生する無気力、自発性の後退、受動的な順応、周囲への無関心、個性の喪失の症状を指し示す。これは施設外の地域との接触の少なさ、私物の少なさ、無為に過ごす時間の長さ等に起因するとされており、対策としては施設の大規模化による事務的運営を避ける、職員が入居者と細やかであたたかい対人接触の努力をする、地域社会との交流を密接にする、日常生活における個人の意思決定による行動を尊重する等があげられている¹⁾。これらは、2002年度に制度化された全室個室・ユニットケアを基本とする小規模生活単位型特別養護老人ホームが目指す方向性²⁾と一致していると言えよう。急激な高齢者の増加に対応するべく、高齢者居住施設の量的整備に主眼が置かれてきたが、近年生活の場としての質的向上が急務とされており、新制度の施行により従来の大部屋による集団処遇から個別ケアへと大きな一歩を踏み出した。

このような背景を受け、先駆的に建設された個室型あるいは個室・ユニット型高齢者居住施設を対象とした研究がなされ始めており、知見も蓄積されつつある。橋は一連の研究³⁾により、施設の個室化はプライバシーの確保のみでなく、入居者が施設という新しい環境において新たな生活を再構築していく上で重要な役割を果たすこと、多様に意味づけされる共用空間が入居者の多様な生活を支えており、各空間の

もつ意味は空間構成のみでなくケア環境にも規定されることを明らかにしている。また、その他の研究では、居室内の家具物品の配置から居室を住みこなす実態を明らかにし、個室環境に求められる要件を明らかにした研究⁴⁾や、共用空間における入居者の居場所・行為・交流相手・姿勢等の分析から、共用空間での生活展開、特に入居者間やスタッフとの交流に焦点を当てた研究⁵⁾等がある。

しかし、これら既往研究の大半が特別養護老人ホーム (以下、特養) 等の要介護高齢者が入居する施設を対象としており、介護者による入居者の生活展開への影響が否めないことが推察される。一方、本研究は養護老人ホーム (以下、養護) を調査対象としている。その理由は前稿⁶⁾においても述べたが、養護入居者は特養と比較すると自立度が高く、痴呆が軽いことから介護方針の影響を受けにくいと、入居者自らの選択による生活展開を分析するのに適していると考えられる。

前稿では、2人部屋で構成されるA養護を対象とした調査から、同室者の一人が自室を中心として滞在している場合、もう片方の同室者は共用空間で滞在する傾向があること、入居者は居室内でテリトリーを形成して同室者と棲み分けていることを明らかにした。その後、A養護は2003年2月に建替えられ、養護としては全国で初めての個室・ユニット型ホームが誕生した。そこで本稿では、2人部屋で構成される旧ホームから全室個室・ユニット型の新ホームに移行した入居者を対象

* 京都大学大学院工学研究科 博士課程・工修
 ** 京都大学大学院工学研究科 教授・工博
 *** 京都大学大学院工学研究科 助手・工博
 **** CASE/まちづくり研究所 代表・工博

Graduate Student, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., M. Eng.
 Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr. Eng.
 Research Assoc., Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr. Eng.
 Case Co., Ltd., Dr. Eng.

として、まずインタビュー調査を通して個室・ユニット化の意義と問題点の把握を試みる。次に行動観察調査に基づいて入居者の生活展開の変化を捉え、これらの変化を旧ホームにおける滞在タイプ別に分析することから同室者の存在が入居者の生活展開に及ぼしていた影響を明らかにする。これらの分析を通して、養護における個室・ユニット化がそこで暮らす入居者にとってどのような意義と問題点をもっているのかについて明らかにすることが本稿の目的である。

なお、本研究で得られた知見は、養護のみではなく、特養等の個室・ユニット型施設計画にも示唆を与えるものであると考える。

2. 調査概要

本稿では、1953年に開設された旧A養護（以下、旧ホーム）および旧A養護の老朽化に伴って2003年2月末に建替え移転された新A養護（以下、新ホーム）を調査対象としている。旧ホームは2人部屋で構成され、廊下に面して居室が並ぶホスピタルモデル型の施設である（図1）。新ホームは全室個室で構成されており、施設全体が6つのユニットに分けられ、各ユニットに食堂や小上がり等の共同生活室、トイレ、浴室が設けられている（図2）。スタッフ配置もユニット固定であり、ユニットケアを導入している。新旧両ホームの施設概要を表1に示す。

新・旧両ホームにおいて、以下に示す調査を実施した。

＜調査1＞入居者属性把握のための入居者およびスタッフへのインタビュー調査。

＜調査2＞6時から19時までの13時間⁷⁾、10分毎に各入居者の滞在場所・行為・姿勢を観察記録する行動観察調査。入居者の承諾を得て居室内も観察している。旧ホームでは2002年10月、新ホームでは2003年6月に各2日間実施した⁸⁾。本稿では新・旧両ホームにおいて調査を実施した入居者の内、痴呆が中度以上⁹⁾の入居者等を分析対象から除外しているため分析対象者は24人である¹⁰⁾。分析対象者の属性を表2に示す。なお、予め行為と空間が規定されている施設プログラム¹¹⁾による行為を削除した上で分析している。

＜調査3＞個室・ユニット化の意義および問題点、入居者の行為の背景、生活でのこだわり・生きがい把握するための入居者へのインタビュー調査。調査は新ホームへの移行1ヶ月前（2003年2月）¹²⁾、移行1ヵ月後（2003年4月）、移行8ヵ月後（2003年11月）の3回にわたって実施した。個室化に対する評価については毎回全入居者に対して質問しているが、それ以外についてはあらかじめ質問項目を決めて行うのではなく、会話の中から汲み取る形をとった。分析対象者は＜調査2＞の24人に旧ホームでの行動観察調査時に入院中であった4人を加えた28人である。

3. 入居者インタビュー調査からみた個室・ユニット化の意義と問題点

＜調査3＞のインタビュー調査に基づき、新ホームへの移行に伴う入居者の意識変化を個室・ユニット化に焦点を当てて考察することから、個室・ユニット化の意義および問題点を明らかにする¹³⁾。

3-1. 個室化に対する評価

表3は各調査時点における各入居者の個室化に対する評価をまとめたものである。

移行1ヶ月前の時点では、調査対象者28人中、個室化に関して「全面的に肯定」が12人、「肯定ではあるが部分的に否定」が5人、「どちらでもない」が6人、「全面的に否定」が5人である。肯定的に捉えて

表1 調査施設概要

	旧ホーム	新ホーム
所在地	秋田県北秋田郡A町地区	秋田県北秋田郡A町地区
開設年月	1953年10月	2003年2月
延床面積	1,321㎡	2,849㎡ (地域交流スペース・デサービス含む)
入居定員	52人 (ショートステイ2人含む)	52人 (ショートステイ2人含む)
居室構成	1人部屋×1, 2人部屋×23, 3人部屋×1 ショートステイ用2人部屋×1 (全室和室)	全室個室 (和室28室・洋室24室)

表2 分析対象者の属性(調査2)

性別	男・8人 女・16人
年齢	平均80.8才 (65才～・5人, 75才～・12人, 85才～・7人)
歩行能力	自力・15人 杖使用・3人 シルバーカー使用・6人
痴呆等	なし・17人 軽度・7人
入居期間	平均13年7ヶ月 (最長4年9ヶ月～最長30年)

図1 旧ホームの平面図

図2 新ホームの平面図

表3 個室に対する評価

入居者	性別	年齢	歩行能力	痴呆等	入居時期	移行1ヶ月前		移行1ヵ月後		移行8ヵ月後	
						評価	理由	評価	理由	評価	理由
A	男	70	自力	なし	1996.8	◎	・2人部屋では同室者に気を使い、また部屋が狭いために趣味の書道ができない。1人部屋になったら書道を思いっきりやりたい	◎	・気兼ねしなくてよい	◎	・自由にできる
B	男	75	自力	なし	2002.9	◎	・やっぱり1人部屋がいい	◎		◎	
C	女	71	自力	軽	1995.11	△	・どちらでもない	◎	・2人部屋の時はよく同室者と喧嘩した	◎	
D	女	88	自力	なし	1984.4	×	・1人部屋では急に体調が悪くなった時に誰も気づいてくれない	◎		◎	・ゆっくりできる ・2人部屋の時にお金を盗られたことがあった ・何かあった時に向かいの部屋の人に声をかけてもらおうような頼みであるので不安は感じない
E	女	90	自力	軽	2001.10	◎	・今まで1人で暮らしたので1人部屋がいい	◎		◎	
F	女	81	杖	なし	2001.11	×	・仲のよい同室者と離れたくない	◎		◎	・どうしてもやっぱり1人部屋がいい
G	女	83	自力	軽	2001.10	×	・仲のよい同室者と離れたくない	◎		◎	・寂しくない。星間はだれかが遊びに来てくれる（インタビュー時にEさんがボタン付けを頼みに来ていた）
H	男	72	自力	軽	1991.5	◎	・部屋が広くなるので新しいタンスを購入した	◎		◎	
I	女	89	自力	なし	1980.4	◎	・同室者に気兼ねしなくていい	◎	・ゆっくり寝られる ・気持ちよくなりすぎる	◎	・気兼ねしなくていい ・旧ホームでは物盗られても揉めたくないから誰にも言えなかった ・1人部屋だと気持ちが安らぐ ・「自分の家」という感じがする
J	女	82	自力	なし	1987.2	○	・同室者の肝で起こされることがなくなる ・病気になった時に同室者に頼んで薬母さんと呼んできてもらえなくなる	◎	・落ち着く	◎	・気楽
K	女	75	自力	なし	1996.1	◎	・2人部屋では、物がなくなった時に同室者との関係が悪化する	◎	・子供がたまに会いに来てても日帰りだったが、個室であると泊まりも可能となる	◎	・気楽 ・2人部屋の時、同室者が物がなくなったと騒いだ。自分は盗んでないのに犯人扱いされてとても嫌な思いをした。私も同室者に物を盗られそうになったことがあったので、それからはなるべく部屋にいないようにしていた。
L	女	81	自力	軽	2001.10	×	・寂しくなと思う	◎	・寂しくない	◎	・ゆっくりできる ・気を使わなくてよい
M	男	84	自力	軽	1999.9	△	・特にない	◎		◎	
(N)	女	88	カー	軽	2002.7	○	・夜ぐっすり寝られる	◎	・静かに寝られる	◎	
O	男	71	杖	なし	1996.10	◎	・気兼ねしなくてよい	◎	・部屋が広い ・テレビが好きな時間に観られる ・気楽	◎	
P	女	85	カー	軽	1999.4	○	・同室者に気兼ねしなくてよい ・しかし寂しくなるかもしれない	×	・寂しい	◎	・もう慣れた。寂しくない。1人部屋のほうがいい。
(Q)	男	71	杖	なし	2002.2	◎	・気楽 ・以前の同室者にいつも物を盗られて困っていた	◎	・夜7時にベッドに入り9時までテレビを観て過ごす。同室者がいる時は夜テレビを観ることができなかった。	◎	・部屋が広いのでタンスや今まで置いてなかった冷蔵庫を置ける。缶コーヒを冷やして飲むのが楽しみ。物を飾る余裕があるので造花を飾ったりして。 ・テレビを観たい時に時間を気にせず観られる。野球放送を最後まで観られるのがうれしい。 ・以前、同室者に物を盗られて喧嘩になった。ものさしで手を叩いたら相手が骨折してしまい始末書を書くはめになった。 ・同室者が民謡のテープを延々と聞くので嫌だった。民謡の何が楽しいのかさっぱり分からない。
(R)	女	83	カー	軽	1999.4	△	・特にない	◎	・何でも自由にできていい	◎	・毎日寝る時間が違う。1人部屋から時間を気にしなくてよい。夜テレビを観るようになった。
S	女	81	カー	なし	2000.6	×	・体調崩した時に気づいてもらえる人がいなくなる	○	・ゆっくり寝られる ・2人部屋の時は分相して掃除したが、今は1人で掃除しないといけないので大変	◎	・気楽
T	女	84	カー	なし	1980.4	◎	・同室者が昼夜逆転して夜ぐっすり寝られない	◎	・以前果けたばあさんと同室で夜寝られなかったが、今はぐっすり寝られる	◎	・以前の同室者は押入の物の出し入れを繰り返して寝れると寝るという生活を24時間していたので夜は熟睡できないし昼も部屋で寛ぐことができなかった。ノイローゼになりそうだった。
U	女	91	カー	なし	1991.11	◎	・1人部屋がいい	◎	・気を使わなくていい	◎	・気を使わなくてよい
V	男	69	自力	なし	1996.5	△	・特にない	◎		◎	
W	男	79	自力	なし	1996.8	○	・気兼ねしなくてよい ・しかし体調崩した時に少し不安	◎	・小さい冷蔵庫を置く予定。前は飾り物を置く余裕もなかった。今はテレビの上に小学生在が作ってくれた造花を飾ったりしている。	◎	・夜テレビが観られる。スポーツ番組を観るのが好きなのだが、スポーツは夜の放映が多く今まで観られなかった。 ・2人部屋の時は常に整頓しておかないと兼母さんに怒られた。今は好きな時に整頓できるからいい。 ・気を使わなくてよい ・広くなったので冷蔵庫を置いた
X	女	92	自力	なし	1982.12	△	・特にない	×	・寂しい	◎	
Y	男	83	カー	なし	1996.3	◎	・ぐっすり寝られる	◎	・朝まで熟睡できる	◎	
(Z)	女	76	カー	なし	1993.6	◎	・テレビを観たくなくてもついても、電気をつけておきたくても消されることがある	◎	・夜中に寝言で起こされることがない	◎	・気兼ねしなくてよい
AA	女	78	杖	なし	1977.6	○	・気兼ねしなくてよい ・体調が悪くなった時に気づいてもらえないかもしれない	◎	・寝たい時、テレビを観たい時にいつでも気兼ねなくできる	◎	・寝る時間が遅くなった。8時45分からのニュースを見て9時ごろ寝る ・裸になろうが気にしないといけない人がいないからいい
BB	女	85	カー	なし	1993.6	△	・特にない	◎		◎	
◇入居者N0.に()が付いている人はインタビュー調査のみ ◇歩行能力の「杖」は杖使用者、「カー」はシルバーカー使用者を指す ◇評価 ◎は「全般的肯定」 ○は「肯定だが部分的に否定」 △は「どちらでもない」 ×は「全般的に否定」を示す						同室者に気兼ねしなくてよい		7	熟睡できる		6
						熟睡できる		4	同室者に気兼ねしなくてよい		4
						部屋が広く使える		2	好きな時にテレビが観られる		4
						物を盗られない		2	部屋が広く使える		4
						落ち着く・気楽		1	落ち着く・気楽		2
						観たくもないテレビを観なくて済む		1	同室者と喧嘩しなくて済む		1
									家族が泊まることができる		1
									「自分の家」という感じがする		1
									聴きたくもない民謡のテープを聴かなくて済む		1
									好きな時に整頓ができる		1
						容態急変等の緊急時に不安		5	寂しい		2
						寂しい		2	1人で掃除するので大変		1
						同室者と離れたくない		2			

いる理由としては、「同室者に気兼ねしなくてよい」が最も多く、その他に「熟睡できる」、「部屋が広く使える」、「物が盗まれない」、「落ち着く・気楽」、「観たくもないテレビを観ないで済む」が挙げられている。否定的に捉えている理由としては、「体調を崩した時に気づいたりスタッフを呼びに行ってくれたりする人がいなくなり不安である」が5人、「寂しくなる」が2人であり、そして残り2人は同じ部屋に入居している女性であり、「同室者と離れたくない」を理由に挙げている。

移行1ヵ月後の時点では、個室に対して「全面的に肯定」が25人、「肯定だが部分的に否定」が1人、「全面的に否定」が2人であり、移行前と比較すると肯定的な評価が増加している。肯定理由は移行1ヶ月前調査と概ね同じであるが、「好きな時にテレビが観られる」、「同室者と喧嘩しなくて済む」、「家族が泊まることができる」が新たな理由として挙げられている。否定理由としては、2人が「寂しい」、1人が「1人で掃除しなければならないので掃除が大変になった」ことを挙げている。

移行前には5人が体調を崩した時の不安を訴えていたが、移行後はこのような意見は聞かれない。これは、新ホームでは各居室にナースコールが設置されていること、スタッフがユニット内に常駐しており何かあればすぐ居室まで来てくれること、また普段の様子と異なれば他の入居者が様子を見に来てくれることが安心につながっている。また、移行前に同室者と離れることに不安を感じていた2人は新ホームでは続き部屋¹⁴⁾に入居した。引越直後、日中は居室間の換を開け放していずれかの居室に2人一緒に滞在していることが多く、夜間のみ換を閉めて各々の居室で就寝していた。しかし、引越から1ヶ月経過した頃には日中でも換を閉め、用事がある時のみ居室間を行き来するようになる。そして、引越から3ヶ月が経過した頃には、2人の内1人が換のところにタンスを置くことをスタッフに相談している。このように、移行前は個室に対して不安を抱いていたものの、個室に入居して新しい環境に慣れるに従って個室希望が強く表れてきている¹⁵⁾。

移行8ヶ月後時点では、全員が個室を肯定的に捉えている。

このように、時間の経過とともに個室に対する評価は高まっている。3回実施した調査を通して、「同室者に気兼ねしなくてよい」(10人)、「落ち着く・気楽」(9人)、「熟睡できる」(7人)、「好きな時にテレビが観られる」(5人)、「部屋が広く使える」(5人)、「物が盗まれない」(4人)等が評価理由として挙げられている。

3-2. ユニット化に対する評価

次に、ユニット化に対する評価についてみる。表4に各調査時点における入居者の評価を示す。

移行1ヶ月前の調査では、「トイレが近い」(2人)、「個人浴」(1人)が評価されているものの、入居者のユニット化に対する関心は低い。

移行1ヵ月後時点では、まず食堂、トイレ、浴室が居室から近いことが評価されており、特にトイレについての評価が高い。食堂については、「料理準備や後片付けに関わることができる¹⁶⁾」の評価が高く、また少人数で食べることで、「熱いものを熱いまま食べられる」、「家庭的な雰囲気がある」、「落ち着いて食べられる」が評価されている。また、「一人でゆったり入れる」個浴の評価も高い。その他に、嫌いな人と別のユニットになったことを評価する声、またそれとは逆に、嫌いな人と一緒にユニットになったことに対する苦情や同じユニットに話し相手がいなくて寂しいという声が聞かれた。

移行8ヵ月後の調査では、食堂に関する意見が入居者により分かれた。少人数で落ち着いて食事するのがよいとする入居者が多いものの、

表4 ユニット化に対する評価 (人)

移行 1ヶ月前	長所	トイレ	近い	2			
		浴室	一人でゆったり入れる	1			
		全体的雰囲気	家庭的	1			
		ユニットメンバー	仲の悪かった人と離れられた	1			
		食堂	料理準備や後片付けに関わることができる	9			
			熱いものを熱いまま食べられる	4			
			近い	2			
			家庭的	2			
			少人数で落ち着いて食べられる	1			
			トイレ	近い	9		
移行 1ヵ月後	長所	浴室	一人でゆったり入れる	9			
			近い	1			
		小上がり	少人数で集まれる所があってよい	1			
		短所	ユニットメンバー	嫌いな人が同じユニットにいる	1		
				同じユニットに話し相手がない	1		
				自分の家にいた時のような感じがする	1		
			移行 8ヵ月後	長所	全体的雰囲気	料理準備や後片付けに関わることができる	4
					食堂	少人数で落ち着いて食べられる	4
		熱いものを熱いまま食べられる				2	
		近い				1	
トイレ	近い	4					
浴室	一人でゆったり入れる	5					
	入りたい時にいつでも入れる	1					
	家庭的	1					
	他ユニット交流	たまに隣のユニットの人とご飯を食べて楽しい			1		
短所	ユニットメンバー	嫌いな人が同じユニットにいる			2		
	食堂	人の分まで仕事を取る人がいる	1				
		料理準備や後片付けを全く手伝わない人がいる	1				
		料理手伝いをしていて陰口を叩かれた	1				
		もっと多くの人と一緒にご飯を食べたい	3				
	行事	誕生日会もユニット毎でするので楽しくない	3				
		行事が減って寂しい	1				

いつも同じメンバーと顔を合わせていると飽きるので、多くの人と一緒に食事を取りたいという意見や、せめて誕生日会¹⁷⁾の時だけでも他ユニットの人と一緒に食べたいという意見が聞かれた。また、ユニット内に嫌いなメンバーがいることの苦情や、料理の手伝いをする中で揉め事が発生していること等、移行後半年以上が経過してユニット内の人間関係に変化が現れてきている。

このように、ユニット化に対する評価は高いものの、ユニットという小さい単位の中で人間関係が煮詰ってくる危険性も孕んでおり、他ユニット入居者や地域との交流促進が課題として浮かび上がってくる。

4. 個室・ユニット化に伴う入居者の生活展開の変化

ここでは、＜調査2＞に基づき、調査対象者24人の新ホームへの移行に伴う滞在场所と行為の変化について考察する。図3に新旧両ホームにおける入居者の滞在场所および行為を示す¹⁸⁾。

4-1. 滞在场所の変化

旧ホームでの滞在场所をみると、自室が49.9%と約半数を占める。次いで、廊下(20.9%)、談話室(9.1%)、喫煙室(5.0%)となっている。新ホームにおいても最も滞在率が高いのは自室であり48.0%¹⁹⁾を占める。次いで多いのが所属ユニット内の食堂(17.7%)、小上がり(9.9%)、廊下(7.0%)である。

滞在场所を自室、共用空間、屋外の3つに分類して滞在率をみると、旧ホームではそれぞれ49.9%、48.6%、1.5%、新ホームでは48.0%、46.7%、5.3%である。旧ホームと比較して、新ホームでは自室および共用空間での滞在が減少して屋外での滞在が増加しているがその差は小さく、全体比較では滞在场所に大きな変化はみられない。

しかし、各入居者別に1日当たりの自室滞在時間を比較すると図4に示すように変化している。調査対象者24人の内、自室滞在が1時間以上増加した入居者が8人、変化が1時間未満だったのが9人、1時間以上減少したのが7人である。増加幅最大のMさんでは190分/日増加しており、逆に減少幅最大のVさんでは180分/日減少している。

4-2. 行為の変化

旧ホームで最も多く観察された行為はテレビ鑑賞であり19.7%を占める。次いで睡眠(12.1%)、無為(12.0%)、移動(10.9%)、会話(9.7%)と続いている。新ホームにおいてもテレビ鑑賞(16.4%)が最も多く、次いで会話(13.3%)、無為(12.7%)、炊事(5.9%)となっている。

図5に入居者別にみた各行為の時間変化およびその平均を示す。

まず変化の平均値でみると、旧ホームと比較して最も増加幅が大きいのが炊事であり、31.9分/日・人の増加がみられる。炊事に次いで会話が24.4分/日・人、読書が20.4分/日・人増加している。逆に、減少幅が大きいのは移動であり32.7分/日・人の減少がみられ、次いでテレビ鑑賞が20.4分/日・人減少している。

入居者別に变化をみると入居者によりばらつきがみられる。炊事、買い物、会話、読書では増加側に偏りがみられ、余暇その他、移動では減少側に偏りがみられる。その他の行為については増減にまたがっている。ばらつきをみると、テレビ鑑賞で個人差が大きく、増加幅が最大のOさんでは205分/日増加、減少幅が最大のFさんでは250分/日減少している。テレビ鑑賞に次いで、無為でばらつきが大きい。

5. 旧ホームにおける滞在タイプ別にみた生活展開の変化

以上みてきたように、生活展開の変化は入居者により一様ではない。ここでは、これらの変化を旧ホームにおける滞在タイプ別に分析することにより、同室者の存在が入居者の生活展開に及ぼしていた影響を明らかにする。

旧ホームでの自室滞在率が50%以上の入居者を自室滞在型、50%未満を共用空間滞在型と設定した上で、同室者2人の滞在型の組み合わせから入居者の旧ホームにおける滞在タイプを6つに分類した(表5)。

滞在タイプ毎に自室滞在時間の増減を示したのが図6である。旧ホームで自室滞在型であった入居者は新ホームにおいて自室滞在が減少し、共用空間滞在型であった入居者は自室滞在が増加する傾向がみられる。この傾向は<R+R>型および<R+CS>CS型で顕著に現れており、<R+R>型では平均90.0分/日の減少、<R+CS>CS型では平均111.7分/日の増加がみられる。

図4 入居者別
自室滞在時間変化

図5 入居者別行為時間変化

表5 同室者2人の居室滞在型組み合わせからみた入居者の滞在タイプ²⁰⁾

同室者2人の滞在型の組み合わせ	入居者の滞在型	入居者の滞在タイプ	人数
自室滞在型+自室滞在型	自室滞在型	<R+R>型	7人(4室)
自室滞在型+共用空間滞在型	自室滞在型	<R+CS>R型	4人(7室)
共用空間滞在型+共用空間滞在型	共用空間滞在型	<R+CS>CS型	6人(1室)
共用空間滞在型+共用空間滞在型	共用空間滞在型	<CS+CS>型	2人(1室)
一時的一人部屋	自室滞在型	<一人部屋>R型	1人(1室)
	共用空間滞在型	<一人部屋>CS型	4人(4室)

※ R=自室 CS=共用空間

図6 滞在タイプ別にみた自室滞在時間の変化

図3 新旧両ホームにおける場所と行為

以下に、滞在タイプ毎の生活展開変化の特徴をまとめる。図7は滞在タイプ別に自室・共用空間における行為時間変化を示したものである²¹⁾。また、図8～13に各滞在タイプの典型事例を示す²²⁾。

①<R+R>型 (7人)

他タイプと比較して、自室でのテレビ鑑賞の減少が著しい。7人中6人で減少がみられ、平均114.3分/日、最大250.0分/日減少している。このように居室内で共に過ごす時間が長い場合、入居者の行為が同室者の行為に引っ張られる形で影響を受けていたことが推察される。Dさんはテレビ鑑賞が減少した分、趣味の読書の時間が増加しているが、その他の入居者では無為や睡眠が増加している。共用空間についてみると、全員で滞在時間が増加しており、食堂で炊事に関わったり、小上がりで会話する等して過ごしている。また、旧ホームでは観察されなかった屋外への散歩、草むしり等の行為も行われるようになった。

②<R+CS>R型 (4人)

Kさんは旧ホームで物を盗まれた経験があったため自室を長時間空けないようにしていた。新ホームでは共用空間での滞在が大幅に増加し、積極的に炊事に関わったり、会話したりして過ごすようになる。

Kさん以外の入居者では自室滞在時間の変化は小さく、自室内の行為についても大きな変化はみられないが、共用空間では炊事や会話等の積極的行為が増加している。

③<R+CS>CS型 (6人)

他タイプに比べて自室滞在時間が大幅に増加している。自室・共用空間別の行為時間も大きく変化しており、旧ホームで多く観察された共用空間での無為、睡眠、テレビ鑑賞が、新ホームでは自室内で行われるようになっていく。また、共用空間での滞在が減少したにもかかわらず、6人中4人で会話が増加している。これらのことから旧ホームでは積極的に行動するために共用空間に滞在していたのではなく、自室に同室者がいるためにやむなく自室から出ていたことが推測される。

④<CS+CS>型 (2人)

<CS+CS>型の2人(Aさん、Oさん)は旧ホームでは自室と喫煙室を中心として滞在しており、喫煙室では喫煙以外にも入居者やスタッフと会話したりお茶を飲んだりして過ごしていた。Aさんは新ホームにおいても自室および喫煙場所に指定されている小上がりを中心として滞在し、小上がりでは喫煙、会話、飲食等で過ごしている。一方、Oさんは仲のよい入居者とユニットが分かれ、また同じユニットには痴呆が中度以上の入居者が多いためにユニット内に話し相手がおらず、喫煙が終わるとすぐ自室あるいは食堂に戻ってテレビを観るようになり、テレビ鑑賞の時間が大幅に増加している。

⑤<1人部屋>R型 (1人)

このタイプはBさん1人であるが、自室での睡眠時間が減少して、読書およびテレビ鑑賞の時間が増加している。

⑥<1人部屋>CS型 (4人)

自室滞在時間についてみると、Vさんで大幅な減少がみられるが、その他の入居者では大きな変化はみられない。また、行為についても他のタイプに比べると変化は小さい。

以上、旧ホームにおける滞在タイプ別に生活展開の変化をみてきた。総じて言えば、自室が他者に気をつかわずに休息できる場、読書等の趣味に集中できる場としての意味合いが増し、共用空間は炊事を行ったり、他入居者やスタッフと交流する等、積極的に行動する場としての意味合いが増したと考えられる。しかし、別の視点からみると、個

室化が自室内での積極的な行為を増加させたとは一概には言えない。また、共用空間で観察された積極的な行為の中で炊事への関わりが大きなウェイトを占めていることから、ユニット化には入居者の積極的な行為を誘発するソフトを伴わせることの必要性が示唆されているといえる。また、ユニット化により仲のよい入居者と離れたために会話が増加して自室に引きこもりがちになる入居者もみられ、ユニット化による弊害も垣間みられた。

図7 滞在タイプ別にみた行為時間変化

図8 生活展開変化[事例<R+R>型・BBさん]

図9 生活展開変化[事例<R+CS>R型・Yさん]

図10 生活展開変化[事例<R+CS>CS型・Tさん]

図11 生活展開変化[事例<CS+CS>型・Oさん]

図12 生活展開変化[事例<1人部屋>R型・Bさん]

図13 生活展開変化[事例<1人部屋>CS型・Iさん]

＜凡例＞ 睡眠 炊事 整頓 会話 読書 テレビ 移動 無為 その他

6. 結論

本稿で得られた知見を要約すると以下のとおりである。

①本稿ではまずインタビュー調査に基づき、個室・ユニット化の意義および問題点を把握することを試みた。

移行1ヶ月前時点では個室に対して否定的に捉える入居者もいたが、新しい環境に慣れるに従って個室の評価が高まっている。評価理由として、「同室者に気兼ねしなくてよい」、「落ち着く・気楽」、「熟睡できる」、「好きな時にテレビが観られる」、「部屋が広く使える」、「物が盗まれない」が挙げられている。

ユニット化についてみると、移行1ヶ月前時点では入居者の関心は低い。移行1ヵ月後では、入居者全般的に評価は高く、小規模な食堂、トイレ等の諸設備の近接性、個浴等が評価されている。しかし、移行8ヵ月後時点では食堂に対する入居者の意見が分かれ、少数で落ち着いて食べるのがよいとする入居者が多いものの、いつも同じメンバーと食事すると飽きるのもっと多くの人と食事を取りたいという意見等がきかれるようになった。また、同じユニットに所属する入居者に対する不満を述べる入居者も増えてきており、ユニットという小さな単位の中で人間関係が煮詰まってくる危険性が捉えられた。

②次に、行動観察調査に基づき、入居者の生活展開の変化を捉えた。滞在場所および行為について変化をみたが、全体平均で比較すると大きな変化はみられなかった。しかし、各入居者別に自室滞在時間の変化をみると変化は一様ではない。また、行為についても入居者によりばらつきがみられ、特にテレビ鑑賞および無為での個人差が大きい。③最後に、各入居者の生活展開の変化を旧ホームにおける滞在タイプ別に分析した。

<R+CS>CS型で特に変化が著しい。このタイプの入居者は、旧ホームにおいて積極的に行動するために共用空間に滞在していたのではなく、自室に同室者がいるために自室からやむなく出ていたことが推察された。<R+CS>CS型に次いで<R+R>型で変化が大きい、居室内に同

室者2人が居合わせることによる行為への影響がうかがわれた。

滞在6タイプ毎に特徴をまとめたが、総じて言えることは、自室が他者に気をつかわずに休息できる場、読書等の趣味に集中できる場としての意味合いが増し、共用空間は炊事を行ったり、他入居者やスタッフと交流する等、積極的に行動する場としての意味合いが増したと考えられる。つまり、入居者は行為によって場所を選択し、メリハリのきいた生活を送るようになったといえる。しかし、違う観点からみると、個室化が自室内での積極的行為を増加させるとは一概に言えない。また、ユニット化には入居者の積極的な行為を誘発するソフトが伴う必要性が示された。入居者のより自律的な生活を誘発するためのハードとソフト両面における仕組みの検討が必要であるといえる。

＜課題＞

新ホームではユニットにより諸室の配置関係に違いがみられることから、空間の差異が入居者の生活展開に及ぼす影響について明らかにすることを次稿の課題としたい。

＜謝辞＞

末筆ながら、度重なる調査に快くご協力していただいたA養護入居者およびスタッフの皆様へ深くお礼申し上げます。

＜注釈＞

- 1) 参考文献1～4参照
- 2) 小規模生活単位型特別養護老人ホームの基本方針として、1. 入居者一人一人の意思および人格を尊重し、入居前の居宅における生活と入居後の生活が連続したものとなるよう配慮しながら、各ユニットにおいて入居者が相互に社会的な関係を築き、自律的な日常生活を営むことを支援すること、2. 地域や家庭との結びつきを重視した運営をすることが掲げられている。参考文献5参照
- 3) 参考文献6～10参照
- 4) 参考文献11～13参照
- 5) 参考文献14～17参照

6) 参考文献 18 参照

7) 旧ホームでの起床時間は6時、消灯時間は21時である。調査開始時間を起床時間に合わせて6時としたが、事前調査により19時には大半の入居者が就寝準備あるいは既に就寝していることが把握されたため、調査終了時間は19時とした。新ホームでは起床・消灯時間は設けられていないが、旧ホーム調査に合わせて新ホームにおいても6時から19時までを調査時間帯に設定した。

8) 調査は平日の2日間とし、調査者1人により下記の日程で実施した。

		調査日	天気
旧ホーム		2002/10/28(月)	曇り一時雨
		2002/10/30(水)	曇り
新ホーム	ユニットⅠ・Ⅱ	2003/6/16(月)	曇り一時晴れ
		2003/6/25(水)	曇り一時雨
	ユニットⅢ・Ⅳ	2003/6/18(水)	晴れ一時曇り
		2003/6/26(木)	曇り
	ユニットⅤ・Ⅵ	2003/6/23(月)	晴れ
		2003/6/27(金)	曇り一時雨

9) 本稿ではBerger Scale 1「どんな環境においても自立している」入居者を「痴呆なし」、Berger Scale 2「慣れた環境においては指導監督なしに適切にふるまえる」入居者を「痴呆軽度」、Berger Scale 3以上の入居者を「痴呆中度以上」とした。

〈Berger Scale〉

1	どんな環境においても自立している
2	慣れた環境においては指導監督なしに適切にふるまえる
3	慣れた環境においても指導監督は必要だが指示のみで適切にふるまえる
4	指示だけでは適切にふるまうことができず介助を要する
5	歩くことができる、生活全般に介助が必要で意味のある会話は成立しない
6	寝たきり又はイスに座らせることができる、言葉には無反応

10) 本稿では入居者自らの選択による生活展開を分析することに主眼を置いているため、空間誘導等のスタッフによる影響がみられる痴呆中度以上の入居者を分析対象から除外した。新・旧両ホームにおいて行動観察調査を実施した37人の内、痴呆中度以上は11人(Berger Scale 3が10人、Berger Scale 4が1人)である。「指示のみで適切にふるまえる」入居者10人は昼夜逆転や徘徊等の問題行動はみられず、また「指示だけでは適切にふるまうことができず介助を要する」1人は昼夜逆転や物盗られ妄想等がみられるが食事時以外は室内に滞在しており、他の入居者へ及ぼす影響力は小さいと考えられる。また、旧ホーム調査以降に車イス使用となった1人、および退院直後で体調が安定していない1人についても分析対象から除外した。

11) 調査実施日に行われた施設プログラムは、旧ホームでは朝食・昼食・夕食、牛乳を飲む、朝の体操とゲーム、入浴、カラオケであり、新ホームでは朝食・昼食・夕食、牛乳・ジュースを飲む、朝の体操とゲーム、入浴、塗り絵(ユニットⅡ)、通院(ユニットⅢ)、散髪(ユニットⅢ・Ⅳ)である。

12) 新ホームへの移行に先立って入居者はスタッフとともに新ホームを見学しており、移転1ヶ月前時点において調査対象者は建替えに伴う敷地の移転・個室化・ユニット化について認識していた。

13) 新ホームに対する「新しい」「綺麗」「立派」という評価は含めていない。個室・ユニット化以外の評価についてみると、移行1ヶ月前時点では、新ホームの短所として7人が「利便性の悪化」を挙げている。旧ホームは町の中心部近辺に位置し、近隣に商店が多く病院も近いが、新ホームへの移転に伴いそれから離れてしまうのが理由である。しかし、旧ホームは町の中心部から急な坂道を上ったところに位置しているため、近隣に商店があったとしても行けない入居者が多かった。そのため、新ホームの「敷地周辺が平坦で坂がない」ことを6人が評価している。移行1ヵ月後には、利便性の悪化について依然として2人が短所としているが、いずれも病院が遠いことを理由に挙げており、買い物の利便性についての苦情は聞かれなくなった。これは、新ホーム移転後に週1回地元の商店が施設内ホールで出店するようになったこと、また敷地周辺が平坦となったことにより近隣の商店に買い物に行く人が増加したことが影響している。

14) 居室間に換気装置が設置されており廊下を通過しなくとも双方の居室の行き来が可能である。

15) 2人は毎食後一緒に食器洗いをしたり、用事があるときは居室を訪問したりしており、人間関係が悪化したわけではない。

16) ユニット毎に調理設備の付いた食堂が設けられており、おかずは厨房で調理されるが、炊飯、お味噌汁作り、おかずの盛り付け、食器洗いは各ユニットの食堂で行われている。

17) 誕生日会が月1回開催されており、旧ホームでは食堂に全員が集まっていたが、新ホームでは各ユニットの食堂で行われている。

18) 滞在率は、(滞在観察回数－プログラムによる滞在回数) ÷ (全観察回数－

全プログラム回数)、行為率は(行為観察回数－プログラムによる行為回数) ÷ (全観察回数－全プログラム回数)で算出した。

19) 新ホームでは居室内に洗面台が設置されているため、旧ホームではトイレ前や洗濯室内の洗面所で行われていた洗顔、歯磨き等の身だしなみ行為、洗濯行為、掃除行為が居室内で行われるようになっており、それらの行為のために自室に滞在していた37回を削除すると自室滞在率は46.8%となる。

20) 痴呆中度以上であるために本稿では分析対象から除外した者と同室であった入居者、および旧ホームでの調査以降に死亡した者と同室であった入居者がいるため、各滞在タイプ別の人数 ÷ 2 = 室数とはなっていない。また、同室者が入院していたために調査時に一時的に1人部屋となっていた居室が5室あった。

21) 各行為の入居者別時間変化を絶対値平均でみたのが下表であり、全行為の内、上位8行為についてグラフ化している。

行為	テレビ鑑賞	会話	無為	移動	睡眠	炊事	整頓	読書
変化時間 絶対値平均 (分/日・人)	71.3	40.2	40.0	39.8	37.7	35.2	24.2	20.8

22) 1日当たりの行為回数で示している。

＜参考文献＞

- 1) 社会心理学用語辞典, p. 311, 北大路書房, 1997
- 2) 発達心理学用語辞典, p. 121-122, 北大路書房, 1999
- 3) 保健医療行動科学辞典, p. 144, メディカルフレンド社, 1999
- 4) R. Barton, 正田巨訳, 施設神経症一病院が精神病をつくる, 晃陽書房, 1985
- 5) 特別養護老人ホームの設置及び運営に関する基準, 第3章第33条, 厚生省令第46号, 1999. 3
- 6) 橋弘志ほか: 個室型特別養護老人ホームにおける個室の個人的領域形成に関する研究, 日本建築学会計画系論文集No. 500, p. 133-138, 1997. 10
- 7) 橋弘志ほか: 特別養護老人ホーム入居者の施設空間に展開する生活行動の場—個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究—その1, 日本建築学会計画系論文集No. 512, p. 115-122, 1998. 10
- 8) 橋弘志ほか: 特別養護老人ホーム入居者の個人的領域形成と施設空間構成—個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究—その2, 日本建築学会計画系論文集No. 523, p. 163-169, 1999. 9
- 9) 橋弘志: 特別養護老人ホームのケア環境と入居者の生活展開の比較—個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究—その3, 日本建築学会計画系論文集No. 548, p. 137-144, 2001. 10
- 10) 橋弘志: 特別養護老人ホーム共用空間におけるセミプライベート・セミパブリック領域の再考—個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究—その4, 日本建築学会計画系論文集No. 557, p. 157-164, 2002. 7
- 11) 林悦子ほか: 個室の住まい方特性—特別養護老人ホームの個の空間に関する研究—, 日本建築学会計画系論文集No. 517, p. 131-138, 1999. 3
- 12) 毛利志保ほか: 家庭的という視点からみた個室環境のあり方に関する考察—高齢者居住施設における住宅的な環境整備に関する研究—, 日本建築学会計画系論文集No. 552, p. 109-115, 2002. 2
- 13) 芹沢由紀ほか: 個室型特別養護老人ホームにおける入居者による居室の住みこなしに関する考察, 日本建築学会計画系論文集No. 554, p. 123-130, 2002. 4
- 14) 柿沢英之ほか: 入所者のグループ形成とその特性に関する考察—個室型特別養護老人ホームの「集まり」に関する事例研究—, 日本建築学会計画系論文集No. 493, p. 153-159, 1997. 3
- 15) 山田明子ほか: 個室型特別養護老人ホームの共用空間における入所者の生活行動に関する考察, 日本建築学会計画系論文集No. 546, p. 105-112, 2001. 8
- 16) 西野達也ほか: 入所者の定位様態からみた共用空間のあり方に関する研究—個室型特別養護老人ホームにおける解析的考察—, 日本建築学会計画系論文集No. 550, p. 151-156, 2001. 12
- 17) 芹沢由紀ほか: 個室型特別養護老人ホームにおける入居者の生活様態とその変容に関する考察, 日本建築学会計画系論文集No. 568, p. 25-31, 2003. 6
- 18) 寺川優美ほか: 2人部屋養護老人ホーム入居者の同室者との関係からみた空間利用の特性, 日本建築学会計画系論文集No. 549, p. 153-159, 2001. 11

(2004年7月9日原稿受理, 2004年11月4日採用決定)